
行動変容WGの来年度以降の活動について

生物多様性国家戦略2023-2030（案）に おける行動変容に関する記載

生物多様性国家戦略2023-2030（案）の枠組

「2050年自然共生社会」「2030年ネイチャーポジティブ」の実現に向け、5つの基本戦略、基本戦略ごとの状態目標（あるべき姿）・行動目標（なすべき行動）、個別施策を各行動目標に紐づけることで、戦略全体を一気通貫で整理するとともに、進捗状況を効果的に管理



生物多様性国家戦略2023-2030（案）における記述

【状態目標】

- 4-1 教育や普及啓発を通じて、生物多様性や人と自然のつながりを重要視する価値観が形成されている
- 4-2 消費行動において、生物多様性への配慮が行われている
- 4-3 自然環境を保全・再生する活動に対する国民の積極的な参加が行われている

【行動目標】

- 4-1 学校等における生物多様性に関する環境教育を推進する
- 4-2 日常的に自然とふれあう機会を提供することで、自然の恩恵や自然と人との関わりなど様々な知識の習得や関心の醸成、人としての豊かな成長を図るとともに、人と動物の適切な関係についての考え方を普及させる
- 4-3 国民に積極的かつ自主的な行動変容を促す**
- 4-4 食品ロスの半減及びその他の物質の廃棄を減少させることを含め、生物多様性に配慮した消費行動を促すため、生物多様性に配慮した選択肢を周知啓発するとともに、選択の機会を増加させ、インセンティブを提示する
- 4-5 伝統文化や地域知・伝統知も活用しつつ地域における自然環境を保全・再生する活動を促進する

生物多様性国家戦略2023-2030（案） 上での位置づけ

行動目標4-3 国民に積極的かつ自主的な行動変容を促す

社会全体でネイチャーポジティブを実現し定着させていくためには、国民一人一人が生物多様性に配慮した商品やサービスを自らの意思で選択できるような社会を構築することが鍵となる。

そのためには、規制的手法（法律等）、財政的手法（補助金等）、そして情報的手法（普及啓発・情報提供等）といった伝統的な政策手法に加え、行動科学等の知見も活用するなど、多様なアプローチが必要である。

（中略）

人々が意識や行動を見直し、自発的に生物多様性の保全に資する選択をするようになるためには、そのきっかけとなる情報や体験、実際に行動を起こす場の提供などが求められる。このため、多様な主体との連携を促すプラットフォーム構築やイベント等の実施、行動科学に関する知見の収集や活用、官民連携の推進等を通じ、人々の行動変容につなげていく。

生物多様性国家戦略2023-2030(案)行動目標4-3 より抜粋

生物多様性国家戦略2023-2030（案） 上での位置づけ

4-3-1 2030 生物多様性枠組実現日本会議(J-GBF)の活動

国内での社会変革を実現するため、国民、経済界、NGO・NPO、地方公共団体などの主体間の連携、協働を進めるためのマルチステークホルダー型のプラットフォームの設置等、以下の事業を実施する。

- ・ 多様な主体が情報交換・認識共有等を行う総会・フォーラム・WG 等の設置・運営
- ・ 生物多様性に関する普及啓発ツールの作成・活用による普及啓発を実施
- ・ セクター横断的な取組を進めるためのフォーラム等の開催
- ・ ナッジ等を活用した行動変容に関する議論や実装

（現状と目標）

指標	現状値	目標値
プラットフォーム関係会議開催数	年5回以上	年5回以上
生物多様性の保全につながる活動への意向を示す人の割合	90% (2022年度)	90% (2030年度)

生物多様性国家戦略2023-2030(案)行動目標4-3-1 より抜粋

生物多様性国家戦略2023-2030（案）上での位置づけ

4-3-2 行動科学等の知見を活用した行動変容の促進

生物多様性の主流化（認識の向上）、国民や企業等を対象とした行動変容（例えば、消費者を対象とした場合、日々の暮らしへの訴求等）に向けた議論・検討を実施する。消費行動や生産行動、寄付行為などを通じた生物多様性保全に向けた個人や個社の取組を促すための仕組みやフレームワークを検討する。

（現状と目標）

- ・ 行動科学等を活用した意識改革や行動変容の効果を把握する
- ・ 行動科学等の活用により意識改革・行動変容を促す割合を向上させた効果的な広報普及啓発を推進する

指標	現状値	目標値
生物多様性の保全につながる活動への意向を示す人の割合	90% (2022年度)	90% (2030年度)
生物多様性の保全につながる活動を既に実施している人の割合	56.3% (2022年度)	60% (2030年度)

生物多様性国家戦略2023-2030(案)行動目標4-3-2 より抜粋

生物多様性国家戦略2023-2030（案）上での位置づけ

4-3-3 「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト等による行動変容

地域版 SDGs である地域循環共生圏を暮らしの観点から実装するための国民運動である「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトや、それらに基づく官民連携による広報活動等を展開し、各界各層の生物多様性主流化に向けた行動変容を促す。

（現状と目標）

指標	現状値	目標値
広報等の国民へのアプローチ数 (HP アクセス数)	25,324pv (2022年度)	30,000pv (2030年度)

生物多様性国家戦略2023-2030(案)行動目標4-3-3 より抜粋

参考：「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト 今年度の主な実績

次世代へのよびかけ



養老孟司先生が
いずれのイベントにも参画

「生物多様性を感じよう！親子自然観察会2022」

日本テレビ「所さんの目がテン！『かがくの里』にて、里山自然観察会を実施。COP15でも発信。後日テレビ放送あり。

「みんなで美味しく楽しく、ライフスタイルシフトにチャレンジ！」～エディブル・スクールヤード（学校菜園）の実践から学ぶ～

小学1年生～6年生の児童と保護者が参加。オンライン開催。アンバサダーの長沢裕さんも講演。



『かがくの里』で養蜂の説明を受けている様子

「エディブル・スクールヤード」イベントの様子



地域創生ふるさと絵本づくり～つくて、つかって、育てる～

地域の年長者から、森里川海と豊かに暮らす知恵・技術・文化を聞き書きし、地域の歴史や人々の生活を振り返り、地域の魅力を発掘する絵本作り。本年は大井川で実施。（2月26日完成披露発表会実施）



- これまで荒川（3地区）、酒匂川で製作。●製作過程をマニュアル化（テキストと動画）し、ウェブサイトに掲載済み。
- 絵本作りがきっかけとなり、秩父市で、陽野ふるさと電力が立ち上がり、小水力発電所を建設。売電収益で、里山保全活動等。

賛同企業等と連携した情報発信

商品の売り場から行動変容を促すワークショップ

講師：森里川海アンバサダーの鎌田安里紗さん
参加者：株式会社そごう・西武の社員24名

埼玉西武ライオンズ主催Green Up Dayイベント

30by30アライアンス加盟セレモニー開催
30by30目標動画上映等（メディア露出約50件）

GTFグリーンチャレンジデー2022in新宿御苑

生き物アプリ「Biome」を活用したクエストを実施



森里川海アンバサダーと連携した情報発信



参考：森里川海アンバサダーとの連携事例



森里川海アンバサダー食・農・生物多様性チームのYae、清水弘美、室谷真由美が中心となり、2回のイベントを通して学生たちにオーガニックな学生生活を実現の推進するために必要なに向けた取組みについて検討を行った。

コンセプトは、「未来を担う高校生～大学生との連携」とし、1回目はアンバサダー側より学生に向けたオーガニックに関する情報提供を中心とし行なった。2回目のイベントでは情報提供を受けた学生からオーガニックな学生生活を実現するための施策アイデアを検討・発表してもらい、未来に繋がる取組みを考えた。

来年度の行動変容WGの活動方針、 内容（案）について

来年度の活動方針について

- 来年度に行動変容に向けて行うべき事業について、生物多様性国家戦略素案等も踏まえつつ、次の2つのアプローチが考えられるが、本WGにおいては、主に①を対象として活動することでどうか。

① 生物多様性保全に興味があるが、実際に行動に移せていない層へのアプローチ

「問5. あなたは、生物多様性の保全に貢献する行動として、次にあげる行動の中で既に取り組んでいることはありますか。（複数回答可）」

→取り組みたい行動があるが行動に移せてはいないと回答した人 33.7%

（参考）

生物多様性保全活動を阻害する要因

- ・体力や時間がないこと 51.2%
- ・何をしたらよいのかよくわからないこと 50.7%

② 生物多様性問題に興味がない層へのアプローチ

→上記と同一質問で、取り組みたいと思わないと回答した人 8.7%

参考：世論調査結果（R4年度調査, 2022.10.14公表）①



「生物多様性」の認知度が上がった（5割→7割）
一方、
「自然に関心がある」者が減った（9割→7割）

表1 自然に対する関心度

	該当者数	関心がある（小計）			関心がない（小計）			無回答
		関心がある	非常に関心がある	ある程度関心がある	関心がない	あまり関心がない	まったく関心がない	
総数	1,557	75.3%	18.2%	57.1%	23.4%	19.8%	3.6%	1.3%
〔都市規模〕								
大都市圏	447	76.5%	19.2%	57.3%	21.7%	18.1%	3.6%	1.8%
大都市圏以外	109	81.7%	24.8%	56.9%	17.4%	12.8%	4.6%	0.9%
政令指定都市	338	74.9%	17.5%	57.4%	23.1%	19.8%	3.3%	2.1%
中核市	648	74.8%	18.2%	56.6%	23.9%	20.2%	3.7%	1.2%
小都市	331	73.4%	14.8%	58.6%	25.7%	22.7%	3.0%	0.9%
町村	131	77.9%	22.9%	55.0%	21.4%	16.8%	4.6%	0.8%
〔性別〕								
男性	729	78.3%	21.5%	56.8%	20.6%	17.1%	3.4%	1.1%
女性	828	72.6%	15.2%	57.4%	26.0%	22.2%	3.7%	1.4%
〔年齢〕								
18～29歳	161	68.3%	19.3%	49.1%	31.7%	25.5%	6.2%	-
30～39歳	161	69.6%	19.9%	49.7%	29.2%	23.6%	5.6%	1.2%
40～49歳	269	74.7%	17.1%	57.6%	25.3%	21.2%	4.1%	-
50～59歳	285	76.5%	19.3%	57.2%	22.5%	20.4%	2.1%	1.1%
60～69歳	253	79.4%	20.9%	58.5%	19.4%	17.8%	1.6%	1.2%
70歳以上	428	77.1%	15.4%	61.7%	20.1%	16.4%	3.7%	2.8%

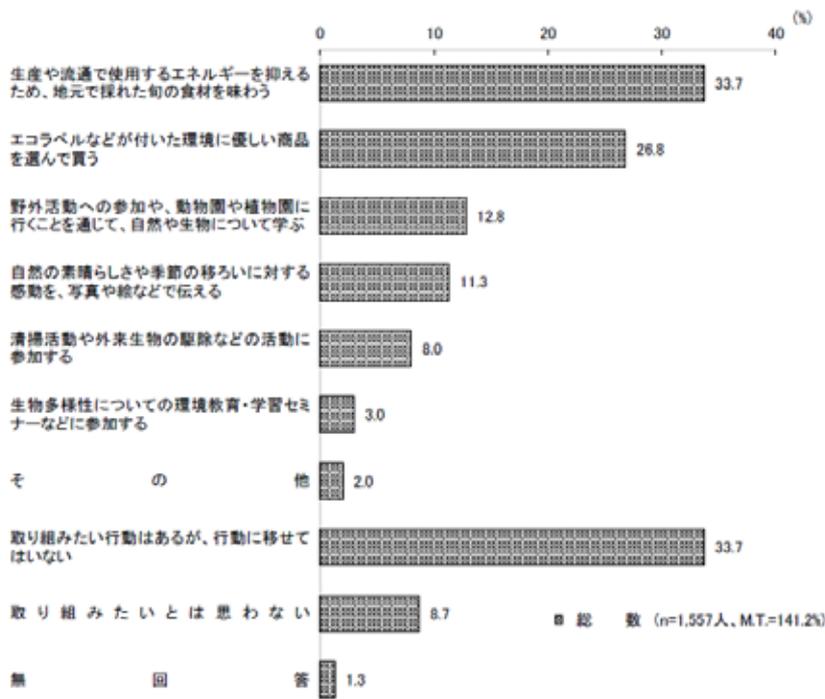
- 「関心あり」は60代で多い（前回調査でも同じ）。
- 「関心あり」はどの年代でも前回に比べて8割ほどに低下。
- 「関心がない」は、
 - ・総数では前回の約2.5倍
 - ・39歳までは約1.6倍
 - ・50代、60代で3倍以上

参考：世論調査結果（R4年度調査, 2022.10.14公表）②



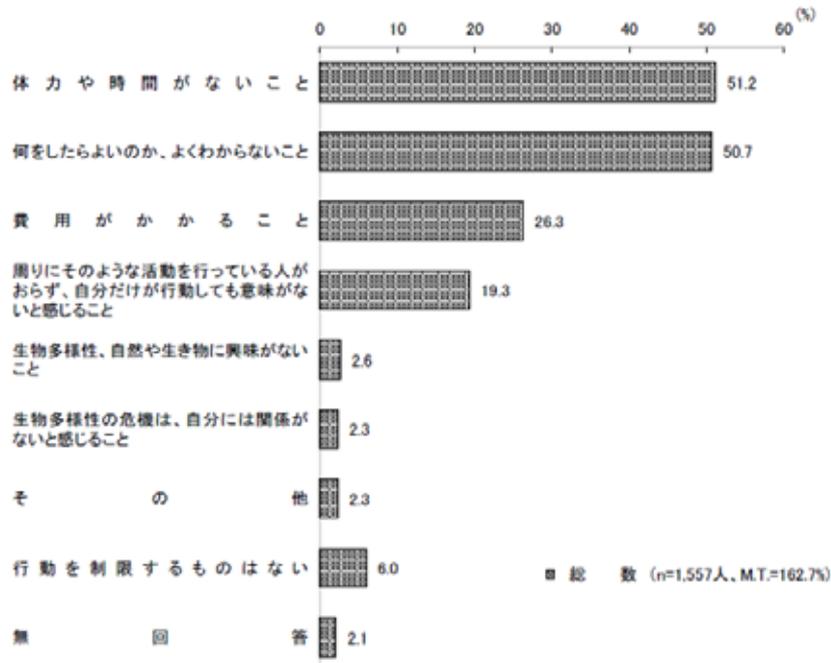
(1) 生物多様性保全活動への取組状況

問5. あなたは、生物多様性の保全に貢献する行動として、次にあげる行動の中で既に取り組んでいることはありますか。（〇はいくつでも）



(2) 生物多様性保全活動を制限する要因

問6. あなたの、生物多様性の保全に貢献する行動を制限することは何ですか。生物多様性の保全に貢献する行動に取り組んでいる場合でも、行動の支障になると感じていることを、お答えください。（〇はいくつでも）



来年度の活動内容（案）について

◆生物多様性の理解促進に関するtips研究

- ・そごう・西武で行ったワークショップ等を参考に各組織（企業・機関、自治体等）での生物多様性に関する取組に向けた説明や合意形成にあたってのtipsの事例を共有・研究。
- ・自分が所属する各組織や地域等に向けた自分なりの説明方法について議論・発表するワークショップを実施。
MY行動宣言の活用も含む

◆生物多様性×「〇〇〇」

- ・生物多様性以外の分野を入口として、生物多様性に資する取組を行っている（行動を促している）活動の事例を共有・研究。
- ・つなげよう、支えよう森里川海プロジェクトの持っているツールやアンバサダー等との連携のアイデアもあれば、集約。

◆ナッジ等を活用した調査事業

- ・次年度の調査事業のテーマについてもご提案等あれば伺いたい。